1953　昭和２８年４月１日発行　　鶴研
雑誌　映画ファン　４月号　７頁



# 新しい時代劇映画を！

**時代劇にも出るスタア二人と現代劇にも出るスタアとが語る時代劇映画についてのあれこれ**

座談会　鶴田浩二・大木実・大友柳太朗

## 話題のラヴシーンと立廻り

鶴田　大木君は時代劇の方が多いんじゃない？

大木　そうなんです。大体はじめが大曾根先生の「江戸城罷り通る」の御落胤で、その次ぎが「天狗廻状」の勤皇の志士、それから「魔像」の荒木陽一郎、「月形半平太」の桂小五郎、「唄祭り清水港」の森の石松、「情火」の彌平といった処で合せて六本、現代劇は５本だったんですが、今度の「闘魂」で６本、漸く時代劇と現代劇とがトントンになりました。

鶴田　そうか、そんなにあるのかァ、そいじゃァ俺の倍だな。俺は初めがやっぱり大曾根おやじの「遊侠の群れ」それから「影法師」「怪塔傳」「彌太郎笠」といった処で大木君の約半分だネ。

大木　でも「影法師」と「彌太郎笠」は前後篇でしょう。

鶴田　そうなんだ、そうすると、丁度君とタイ記録になるね。現代劇も入れると俺は39本になるけど。

大友　ほう、鶴田さんはまだそのくらいのもんですか

【大友さん、さも意外そうな顔をする】

鶴田　そうなんですよ、先生はどれ位になりますか。

大友　そうですねえ、50本ぐらいになりますかなァ。私は貴方の「彌太郎笠」を２回も観ましたよ、それも木戸銭払ってね。

鶴田　うわァ、いけねえ、どうも有難うございます。

大友　木戸銭返せ！　と云いたいんですがね正直な処、あの時の立廻りとラヴシーンは、我々の間で問題になったんですよ。今迄にない味が出てましたもんねえ、とても僕らの演れないことを、サラリとやってのけている。

鶴田　何も知らないから出来たんですよ、あの立廻りなんかマキノ先生が全部やって見せてくれたものを、そのまんまやっただけの事なんですよ。

大友　そりゃ嘘ですよ、マキノ先生はそりゃ器用な方ですよ、それで貴方がその通り演られただけだとおっしゃるのも本当でしょうが、それだけで出来たものじゃないですよ、やっぱり貴方が持っている何かがありますからね。それがこん然と一体になって、あの結果が出たと思うんですよ、私のいうのは、その何かなんですがね。

鶴田　若しそんなものがあるとすれば、それは型にはまってないと云う事じゃないですか。

大友　それもありましょうが、それとは又ちがうんですね。然し、その型にはまってないと云いますか、その板についてない処に我々は魅力を感じますねえ。

## 性格の描けた役柄を

大木　未完成の魅力って奴ですか。

大友　そうとも云えましょうね。

大木　けどそれはしょうがないから、そういう方法をとってるだけなんですよ、私なんかが大刀を腰に差しても、まるで棒っきれかなんかを差してるみたいで恰好がつかない。処が先生なんかが差してるのをみると、いかにもずっしりと納まってる。

大友　その先生はやめて下さいよ。まだ若いんですから。

鶴田　そうですかァ。僕は５銭の入場料払って、先生の映画観たの覚えてますよ。（笑）

大木　たとえば歩き方一つにしても先生のは年期がはいっているから、ちゃんと時代劇の型になってる。それをこっちがその通り負けないでやろうとするには、よほどの天才でもない限り、10 年の年期が入っているものなら 10 年やらなきゃ追つきっこないですからね、だからツボを外した演り方をするより仕方がないんですよ。

鶴田　そうなんだ、現代劇から時代劇に入るのはとてもむつかしいんだ。とてもいけないって云うんで、僕の「彌太郎笠」みたいなゆき方をするのと、営々と努力して、なんとかその型にはまった演技を身につけ様とするのと、まァ一応だけでも知らないよりはマシだろうからやっとこうというのと三つの型があると思うんだけど、これからは何とか新らしい型の時代劇を生む様に努力して行くのが本当じゃないんですかね。

大友　たしかにそうですね。とかく時代劇というとストーリィ第一主義で、その人物の人間性というものが忘れられ勝ちですからね、私はその人間性がはっきり描かれている役でないと、根が不器用ですから、何も出来ないんですよ。

大木　それはそうですね。この前僕も森の石松をやれと云われた時、まるで自信がないんでね、出来ませんからって云ったんですけど、まァ演って見ろって云われて演ったんですが、矢っ張りいけなかった。商売ですからそんなことじゃいけないと思うんですが、駄目ですねえ。ただ御用々々っていって十手をふり廻している役もつまらんですが、自分の役どころっていうものが掴めないで演るのも辛いもんです。

## 新撰組の沖田総司という男

鶴田　僕はいま沖田総司を主人公にしたものを演りたいと思っていろいろ練っているんだけどね。

大友　沖田ってあの新撰組のですか。

鶴田　そうなんです。沖田っていうのは面白いと思うんですよ、ずば抜けて剣が強くってネ。大友さんは今迄に新撰組を描いたものに随分お出になったでしょう。

大友　そうですねえ、ところが割に無いんですよ、出ていてもたいてい勤皇側でしてネ、桂小五郎かなんかが多いんです。

鶴田　それじゃァ私の敵だ（笑）この沖田ってえのはね、ふだんはそんなに強くないんだけど、いざとなると強いんだね。新撰組というものと、近藤勇ってえものに絶対の信頼をおいてネ、近藤の云うことなら何でもきくんだ。それが自分の人生のすべ

てだと思っている様な男でね、新撰組っていうのは、寄せ集め世帯で、前科のある男が逃げ込んで来て隊士になったり、出世のふみ台にしようとして入って来たりする者が居たり、また勤皇方のスパイも勿論入って来てるだろうしネ。新撰組は今の予備隊みたいなしかけになっていて、脱退したい者には適当な手当金を渡して帰すことになっているんだが、脱退は原則として許さない。然しその事は表面に出さないで、と云うことは、それが知れると入隊して来る奴が居なくなるからネ。それで一応やめたいと申し出た者には、金を渡してやめさせてやる。そして、そ奴が必ず通らなければならない街道に待ちうけて、バッサリと斬るのが、この沖田総司の役なんだね、そういう時になると、この男は絶対に強いんだ、ずいぶん無茶な話だけどね。中には沖田を見ただけで泣いて見逃してくれというのも居るし、親がいる、妻子がいるんだと拝む奴もいる、腕に覚えのある者は、何おッ！て云うんで向って来るが、たとえどんな条件にぶつかっても、必ず斬ってくる。そのことに何の疑念も持たないという奴なんだ。

【ちょっとこの処、鶴田浩二独演会である】

　ところがねえ、こ奴が人を斬ることに疑いを持つ様になって来るんだネ、というのは胸をやられて血を吐く様になっちゃう。でも血を吐き乍らも人は斬るんだが、段々気が弱くなって来るんだね。女性とも色々交渉があるんだけど、丈夫な頃はいい加減にあしらっていたのが、血を吐く様になってから、かあーっとその方も激しくなってくる。それで益々身体が弱って、しまいに新撰組をやめて、故郷へ帰り、養生をしたいと申し出るんだ。むろんＯ・Ｋになる。それで帰途につくんだが自分がいつも待ち受けて隊をやめて帰る人間達を斬っていた場所に来ると、そこに土方歳三が立っているんだ。

大友　ふむふむ。

【一生懸命みたいな顔をして聞いている】

鶴田　来たな！と思うんだね、この土方役なんか大木君がやると良いと思うんだがなァ。そこで土方が云うんだ〝命令で来た。お前は俺より強いんだから、あるいは俺の方が殺られるかも知れない、然し俺も死にたくはないし命令なんだからやるぞ、さァ刀を抜け〟ってね、で沖田も〝分った〟っていうわけなんだな

【この辺、鶴田の考えではクライマックスなのであろう、眼がランランと輝き、唇を舌でなめ乍ら、幾分興奮のおも持ちである】

だけど刀は抜かないんだ、くるりと後を向いてね、差していた大小を道に捨てるんだ。するとねその足もとにドサッと金包みがほうり出されて、パチンとツバ鳴りがすると〝土方歳三、沖田総司の命を貰った〟と、そのまま土方は引揚げちゃうんだ。それで帰ってね、近藤勇に報告するんだ。〝沖田を斬って参りました〟ってねその時、近藤勇はねえ、後を見せて机かなんかに向って書き物をしてるんだが、それを聞いて背を見せたまま頷（うな）ずくんだ。そしてホロリと涙を流すんだ。嘘と知ってゝね。

大友　良いとこですね。

鶴田　　ハハハ、良いでしょ、それからまだあるんですよ。パッと場面が変ると沖田総司はその街道で腹を切って死んでるんです。その頃は池田屋の斬込みとか、坂本龍馬の襲撃とか有名な出来事がいっぱいあるでしょう、その時いつも真っ先きかけて斬込むのを沖田にするんです。坂本龍馬の犯人は、佐々木唯三郎ということになっているけど、これも確かなものじゃないですからねえ、ウソでも良いからこれも沖田総司にするんですよ。

## ペロッと綺麗な舞子はんを

大木　　でも内容が余り暗すぎやしませんか。

鶴田　　そうなんだよ、だから会社も仲々映画化してくれないんだ。でもやりたいなァ。色どりには少しパアなんだけど凄く可愛らしい舞妓はんを出してネ。これが嘘をつくのが大好きだという妓にするんだ。つまりね、凄く可変いいから誰でもすぐ好きになっちゃうだろ、そうするといけ好かない奴だと云ってはだまし、自分が好きになった人でも、相手があいてにしないと、えゝロ惜しいっていうんでだまし、といった具合にネ、その頃は勤皇か幕府だろ、そのどっちかへすぐ密告したりするんだネ。だからこの妓の為に殺されたりする奴が続々とあるんだ。池田屋とか坂本龍馬の襲撃にもこの妓をからませて良いと思うんだ、このデンでね。だけど流石のこの妓にも歯の立たない相手がいるんだ。それが沖田なんだ。でも沖田が死ぬ時、その側にこの妓を出したいんだ。本当に惚れてたのは沖田だって気がついてね。だから二人の間は何もなかったという事にしたいんだ。ペロッと可愛いい妓だから、勤皇も幕府側もすっかり信用しているっていうことで、何か面白いテがあると思うんだけどね。

大友　　まだいろいろとテがありそうですねえ。然し黒沢先生（黒沢明監督）の「決闘鍵屋の辻」を始め、いわゆる新解訳の時代劇というものは、えてして暗いものが多い、というよりは今迄の概念にある派手さというものがないから興行的に成算がたたない、だから、仲々会社側がつくろうとしないですね。

鶴田　　明るく楽しい松竹映画ってタイトルがあるくらいだから、ことにウチ（松竹）ではむつかしいね。（笑）

大木　　そう云えば今度お宅（東映）で撮った「加賀騒動」も新解訳物でしょう。村上元三先生の。

大友　　そうなんです、従来悪人とされていた大槻伝蔵の新訳みたいなものですが、大変くらい内容のものなのです。それを亡くなられた伊丹万作先生を偲んで、お弟子さんの佐伯清先生が撮られたものなのですが、これをとりあげたということは、東映としては大変リッパな事だと思いますね。

鶴田　　我田引水ですネ。

大友　　いえ、私はフリーですから、別に我引田水じゃないと思うんですよ。

鶴田　　大友先生は東映専属じゃないんですか。

大友　　明日のことは分りませんが、少くとも現在只今ではフリーでございますね。です

から大映さんにもだいぶ出ておりますが、やはり東映さんが一番よく使（っこ）うて下さいますので、一般には東映専属のように思われとるのでしょう。まァ然し、そんなものみたいなも[1]んですよ（笑）

## 乗る馬に乗られた大木実

鶴田　話は違いますが先生は大分この方は強いんでしょう。

【一杯飲むゼスチュアを見せる】

大友　いやァたいしたことはありません。然し、何しろ５歳（いっつ）の時よりやっておりましたから好きなことは好きです。

大木　５歳って、10と５歳ですか。

大友　いや、ただの５歳です。

鶴田　ひえっ！ 凄げえなァ（笑）

大木　そりゃまたどうしてです。

大友　家がつくり酒屋でございましたからね。５ツの頃から腰にヒョウタンか何かをぶら下げましてネ、その中に酒を入れて、遊び乍らも、ちびちびと飲んどるのです。それよりか鶴田さんは相当お強いと聞いていたんですが。

鶴田　いやァ昔は飲みましたがね。

大友　そう年寄りみたいなこと云わんとおいて下さい（笑）

鶴田　あまり無茶飲みをしましてねえ、医者に胃かいようの一歩手前だとおどかされてからは、プッツリとはいかないんですがねえ、加減する様にはなりましたよ。僕よか大木君の方が、今は飲むんじゃないですか。

大木　いや駄目ですよ、たいしたことないです。

大友　あゝそう云えば貴方いつか馬から落ちましたねえ、どうしました。

大木　ええ、はじめ落ちた時は助かったんですが、二度目には馬の下敷きになっちゃいましてねえ。

鶴田　なんだおい、馬は乗るもんで、乗られるもんではねえぞォ。どうしたんだい一体。（笑）

【大木君にが笑いして頭を掻く】

大木　「大江戸五人男」の時でしてねえ、袴のすそが鞍にひっかかっちゃったんです、それでうまく落ちられなかったんですが、でも馬ってヤツは落ちてもジッとしていれば、決して踏まないもんで、ジッとしてたら僕の乗ってた馬も、後から来たのも飛びこえて行ってくれたんです。それが二度目の時はロングで二騎走るシーンで、天龍寺まで行くんです。そこでカメラのフレームがきれるんで、お寺の門を閉めておいてくれる様に頼んどいたんですが、それが開いてたんです。馬と馬との距離を一定の間かくを保つ様にと云われてたんで、後ばかり気にしてたら、馬が寺の中に飛び込んじゃった。入るとすぐ御影石の橋があるんですよ、そこで馬がすべっちゃいましてねえ、横っ倒しになっちゃったんですよ、それでズン！と下敷きになっち

[1] もは管理人追加

やった。

鶴田　タイトルに名前も出ない役で怪我なんかして、ずいぶんワリが悪いなァ。

大木　あとで見たら、橋のらんかんていうんですか、柱があるでしよ、あれが折れてましたよ。凄かったですネ。思い出してもゾッとしますよ。あの時は鈴ヵ森のシーンにも出てたんですよ、駕籠かきの役で、幡隨院長兵衛の駕籠の前棒をかついでたんです。

## 時代劇を天然色で撮りたい

大友　私は前から思っとったんですが、天然色映画は時代劇でもって撮ったらよいと思うんですがね。

鶴田　それは絶対ですネ、単なるコスチューム・プレイに終らせずにね。

大友　そうです。それで天草四郎なんかを鶴田さんでやったら良いと思うんですが、どうですか、あの時代の衣裳は綺麗ですよ。

鶴田　実は天草四郎は僕も狙ってたんですよ「恋の天草四郎」っていう面白いのが何かの本に出てるんです。

大友　ほう、そうですか。

大木　日米合作で、エロール・フリンが撮るって話があるんじゃないですか。

鶴田　それでエロール・フリンが天草四郎をやるのかい。

大木　そうじゃないですか。

鶴田　よせやい、天草四郎は日本人だぜ。（笑）

大友　然し天草という処は不思議な処ですね、前に東映で川喜多君で撮ったことあるんですが、その時現地にロケしました処、あすこには教会が一軒もないんです。

大木　えッ、そんなことないでしょ、意外ですね。

大友　そうなんですよ、それで人家500軒の町なんですが、そこにパチンコ屋が80軒もある。不思議な処ですね、ですから天草をあつかうにしても、あすこへロケしても何の意味もないんですよ。何処ぞに適当な処を見つけなければ。

鶴田　あの天草四郎っていうのは、何ていうのかな、こういう髪をしてるでしょう。

大友　あゝ、それはハチモンて云うんです。

鶴田　真ん中から分けて額にパラリと下げてるヤツ。あれをね、真ん中からでなく七三に分けたらどうなんだろう。いかにもカツラ然とした頭でなく、ごく自然なヅラにして。

大友　良いかも知れませんね。実を云いますとね、度びたび宣伝する様でなんですが、「加賀騒動」では、東映の林さんという結髪さんが、いろいろ研究しておりましてねえ、なるべく地頭に近いものをつくっておるんです。ですから三島雅夫さんなどは場面によって殆んどメーキャップなしで出ております。つまり頭が自然ですから、メーキャップしなくとも良いんですね。今迄のだと頭がきついですから、眉なども濃く描かねばならなかったんですが。

鶴田　そういう傾向は良いですね。「情火」の時の大木君は地頭だったね。

大木　　そうです。

鶴田　　それでちっともおかしくないどころか、野性的で良かった。

大友　　元禄時代とか、池部さんの演った「袴垂保輔」の時代なんかも色彩向きですね。

鶴田　　そうですね、それから森蘭丸の時代も面白いと思うんだけど、何れにしても時代劇というと頭が痛いね、衣裳つけると、自分じゃスマートなつもりでも、はたで平家蟹みたいだって笑うもんナ。

大木　　ほんとですね。

大友　　いやそんなことないです。皆さんリッパですよ。

鶴田　　ひやかさないで下さいよ。だけど新らしい時代劇スタアとか、新らしい時代劇というものが台頭すべきチャンスがあるとしたら、それは今が絶好の時期だと思いますね。

大友　　そのトップバッターには鶴田さん、大木さんあたりがなって貰うんですね、時代劇はこれからはもっとリアルになって来なくてはいけないと思いますし、そういうことは、やっぱり元気な若い人達でなくては出来ないと思います。

鶴田　　どうも恐れ入ります。大いにガンバリます。